

## 北海道における脊椎関節炎診療の現況

片山整形外科リウマチ科クリニック 片山 耕

数年前まで脊椎関節炎（Spondyloarthritis；SpA）という病名は北海道のほとんどの医師によく理解されていなかったようです。私も、リウマチ反応陰性関節炎の別名というような理解でした。2013年から3年連続 EULAR（ベルリン、マドリード、パリ）へ行きましたが、SpAの演題がとて多いのでびっくりしました。特に、ASASによるSpAの分類基準（Axial SpA, Peripheral SpA）という過去の分類よりわかりやすい基準ができ、MRIによる早期の仙腸関節病変（骨髄浮腫；Bone marrow edema）の所見を重視することが確認され、いままであいまいだったSpAの概念をとてわかりやすくするものと感じられました。わたしは、関節リウマチのMRIによる関節病変評価にとて関心があり、とくに骨髄浮腫病変が急速な関節破壊に関与することを研究してきたのでこの考えはなじみやすいものでした。

自分のことはさておき、北海道のSpA診療の現況に関してお話ししたいと思います。5-6年前、両股関節の安静時および運動時痛を主訴として40歳代の女性がわたしのクリニックに来られました。レントゲンでは股関節は正常で圧痛もありませんでしたが、消炎鎮痛剤でも症状が改善せず、人工股関節手術の予定が入っていました。しかし、レントゲン上、仙腸関節の狭小化・一部強直像あり、また仙腸関節、足関節、アキレス腱を含め付着部の圧痛が多数みとめられSpAと考え、アザルフィジンの経口投与、仙腸関節のステロイド局所注射を行い症状の著明な改善を認めました。この女性の患者さんのようにSpAが腰椎疾患や股関節疾患と誤診される事例が多かったと推察されます。このような観点から、北海道のリウマチ診療に携わる内科・整形外科の医師を中心に広くSpAのことを知ってもらうことを目的として時計台記念クリニックの今野孝彦先生を中心に「脊椎関節炎研究会（北海道）」が設立されました。また、おおさき内科の大崎博史先生が内科的側面よりわたくしが整形外科的側面から、今野先生のお手伝いをさせていただくことになりました。道内のリウマチ科、整形外科の先生を中心に声がけし平成23年より年1回5年間（第4回は悪天候の為中止）にわたり講演会を開催してまいりました。研究会は一般演題と特別講演からなっており、特別講演は第1回と第2回では浦野房三先生にそれぞれ「広範囲疼痛について～強直性脊椎炎、未分化型脊椎関節炎～」 「脊椎関節炎の治療と予後」について、第3回では七川歆次先生に「付着部炎の臨床」、第4回および第5回では小竹茂先生にそれぞれ「クラミジア感染と脊椎関節炎」（悪天候中止） および「腸炎性関節炎」を演題名としてお話していただきました。一般演題も、第1回では「超音波による付着部炎の検出」（阿部技師、今野）、「開業医から見た脊椎関節炎」（大崎）、第2回では「脊椎関節炎を考える～眼科医の立場から～」（Dr. Bastanfard）、「脊椎関節炎の予後と評価法」（今野）、「脊椎関節炎の治療の現状」（内科—大崎、整形—筆者）、第3回ではイントロダクションとして「脊椎関節炎と線維筋痛症」

(今野)、第5回ではイントロダクションとして「研究会のこれまでの経緯と J Rheumatol の論文紹介〜」(今野)、一般演題として「腸炎性関節炎の症例」(南家)、「MRI で異常を認めた腸炎性関節炎の2例」(古川)と多くの発表がありました。特に印象的だったのは、超高齢の七川先生がお亡くなりになる約1年前の本講演で、60分もの長時間をずっと演壇の横に立って付着部炎の歴史や考え方に関して御講演されたことでした。整形外科研修当時から尊敬申し上げていた七川先生の最後の御講演を拝聴できたことを大変有難いと思っています。七川先生の強いご要望があり、第2回からは「日本脊椎関節炎学会」が後援の形をとっています。また、毎年、講演集を作成し参加者に配布し、脊椎関節炎の啓蒙に役立てています。

最後に、ここ数年強直性脊椎炎(Ankylosing spondylitis; AS)や関節症性乾癬などに関する TNF や IL17 阻害剤等の生物学的製剤の講演会が増えてくるにつれて整形外科や皮膚科の先生も SpA に対する認識をさらに深めつつあるようです。去年の10月に札幌で AS の講演会があり Maxime Dougados 先生が「Current evidence for the management of ankylosing spondylitis」という内容での講演をされました。講演では関節、皮膚、目、腸などの各部位から展開されていく SpA という疾患の説明、変化した疾患概念の歴史、そして治療の考え方に関して大変興味深く聞かせていただきました。また、症例報告の重要性について学びました。Dougados 先生の講演の前座として「AS の鑑別診断における留意点」という内科の先生向けの AS の画像診断を目的とした話をする機会をいただきましたが、整形外科だけでなく内科の医師も画像所見を参考にしながら AS や SpA を診断していく日が近づきつつある気がしました。